

業へ諸資材の見当はなく継続の前後の策もなくしていた。

私は、もとより運を天に任せてと着工したが、使用日本人の行方を案じたが、あのとときあの地にては何の策もなく自然のなりゆきを待つばかりであった。船体の大切から中止しただけでもあの威嚇を受けたし、再度着工が出来なくなったらどのようにされるかと思うと気の遠くなる思いであった。水切線まで巻き揚げた船体を只呆然と眺めているだけだった。

右の思いに落ち込んでいたのが不思議にも南風により大時化を与えられて、右の苦境を乗り越えたとき生気に生まれ変わった。私はずぶぬれの姿で船長室（南樺丸）に登り祖国の方位に座して塩水か汗か喜びの涙か区分なく流れ落しました。そして、無事に引渡しも出来まして、我等一同も無事引き揚げて今日あると思っております。

今日に至ってもあの南風は祖国の方から北上した風であったことを思い、祖国より与えられた神風であり、又天祐神助を与えられた喜びとして永遠に記念しております。

## 私の体験 樺太・シベリア Ⅱ

北海道 水野 力

### 一、転職渡樺

私は、年期を入れた雑穀商も国家総動員法によりだめになり、樺太警察官に応募することになった。昭和十四年六月警察官拝命。二か所めの散江駐在所が最後の部落放棄の悲運の地となった。私は超特級クラスの僻地が支持区域であった。

### 二、戦中、敗戦のどさくさの苦勞

1、昭和十九年四月、石油輸送船が潜水艦の追跡で、キトコロ沿岸で座礁。電波探知されぬよう散江郵便局から有線打電。

2、同十九年五月、海豹島が艦砲射撃を受ける。

3、昭和二十年に入ると、多来加湾に難破船の残骸、漂流物、死体の漂着。

4、漁船が砲撃を受ける。五隻、死者十六人。

5、罐詰工場跡が破壊焼失。電話線切断。

6、十六人の合同慰霊祭を八月八日、散江国民学校で

盛大に挙行。

7、八月九日ソ連軍参戦。国境軍隊南下。駐在所が参謀本部化の感あり。

8、八月十五日重大玉音放送、樺太庁長官布告。駐在所が責任を持って指示する。地元民は秩序ある行動をとって協力してくれる。

9、八月十六日部落放棄命令が発せられる。夕方乗船、残りの人は十七日乗船。敷香第三小学校に収容。

10、八月二十日、ソ連軍の南下に伴い、敷香町放棄。列車もなく徒歩で南下。行列は悲惨な姿で、知取町に到着。

11、元の住所地に戻され、警察署を開設し、ラジオ、銃砲刀剣類の供出と書類作成、保管などの業務をする。

三、シベリア抑留のつらいつらい苦勞

私は昭和二十年九月六日、女学校に集合。五十度線の対岸ポートワニヤに十月二十三日上陸。「ヤポンスキーダモイ」「ホッカイドウダモイ」は嘘であった。シベリアでの重労働は、つらいつらい毎日の連続であった。

1、昭和二十一年九月まで、鉄道新設線工事。土砂積

込。穴堀。電柱立等。コルホーズへの移動。

2、昭和二十二年十月二十日までコルホーズで、ジャガイモ、大豆、ひまわりの収穫作業など。

3、昭和二十二年二月十五日まで、鉄道工事。丸太運搬時転倒し左手首骨折のため入院。

4、昭和二十二年三月十八日まで、入院し治療、退院。

5、昭和二十二年七月九日まで、夜警、靴工助手。

6、昭和二十二年十月六日まで、砂利採取作業。作業中右足首捻挫のため入院。

7、昭和二十二年十月二十八日まで、入院し治療、退院。

8、昭和二十年七月九日まで、病院にて靴工として勤務。

9、昭和二十四年一月二十一日まで、鉄道路艦構築作業。二交替制。

10、昭和二十四年十一月十一日まで、建築作業の雑役（煉瓦積み建築）。

11、昭和二十四年十二月十二日帰国命令。

12、昭和二十四年十一月十四日ハバロフスク、ナホト

カ、舞鶴（入港三十日、上陸十二月二日）。

13、昭和二十四年十二月十日 帰宅。

#### 四、私の帰国後の苦勞

私が最重労働をしている間に妻は二人の幼児を連れて、昭和二十二年真岡、函館経由で帰国。無理がたたり現在まで、重度のリューマチの後遺症に悩まされている。

私は舞鶴で、千円の支給を受け、大金だと思っていたが、家に着いた時は二百円しか残っていなかった。抑留五年で経済事情が変化し、浦島太郎のような苦勞の連続だった。

帰国後の就職は、警察の復職はだめで雑穀商の経験を生かして、砂糖や小麦粉や澱粉等の集荷をして加工業者に納入する仕事をはじめた。雑穀よりジャガイモの方が小資本で大量の取引ができ、食料品のジャガイモを専業にし、家族ぐるみで有限会社を設立した。年商一億円を頂点にし、設備投資やら天候不順の年まわりがたたり、再起不能の損失を生じた。

二代目の息子の経営で可愛想だったが、シベリアの苦勞を思えば、これぐらい苦勞の内に入らないと頑張らせ

ている。

#### 真岡の艦砲射撃に伴う

八月二十日前後の思い出

北海道 佐藤晴夫

戦争は終わった。私はソ連参戦とともに特設警備隊に応召し小能登呂飛行場警備の任に着いていたが、翌十六日召集解除になり、再び村役場（真岡郡蘭泊村）の庶務主任に戻ると早速婦女子の緊急本土引揚げ業務に忙殺されていた。引揚げの方法は陸上輸送（鉄道により大泊から海路を利用する。）と海上輸送（村の漁船を動員し計画的に蘭泊港から稚内港に運ぶ）の二つであった。

十九日に第一班を鉄道で送り、二十日の朝第二班を送るべく早起きをして外気を吸っていると、家の前を通った友人から「早朝恵須取方面から避難して来た船が、洋上でソ連艦隊と遭遇し、慌てて蘭泊港へ寄港したのとこのとだ」と話してくれた。そういえば、遙か沖合に数